

## 4 コレクションの概要

### ■自然部門

自然分野の収蔵標本は地学・植物・昆虫・動物の各分野によって構成され、鳥取県の自然史解明に資することをおもな目的としている。収集対象となるのは鳥取県および周辺地域のものが中心であるが、比較用あるいは展示や学習支援での活用を目的に県外産・海外産のものも収集している。収集は学芸員による採集・拾得や個人コレクションの寄贈、業者や個人からの購入といった方法で行われている。

現時点での登録数約100,000点、登録外資料や整理中の標本を含めるとおよそ150,000点ほどである。そのうち約17,000点は、当館の前身となる鳥取県立科学館・鳥取県立科学博物館(昭和24～47年)の時代に収集されたものである。

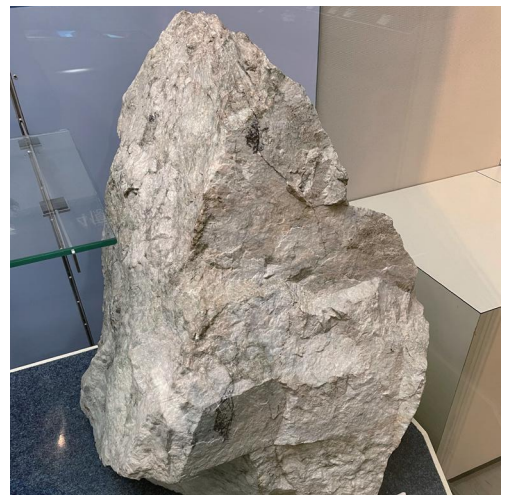
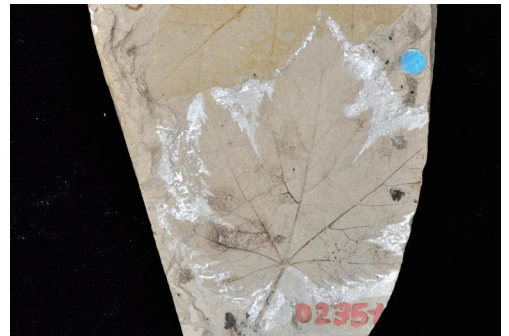
#### ◎地学標本

地学分野では約10,000点の標本を収蔵しており、うち化石標本約7,000点、岩石標本約1,000点、鉱物標本約2,000点である。

化石標本は日本海形成期にあたる新第三紀(約2300万～260万年前)の県内産化石が中心で、当時の生物相や古環境の解明に貢献している。代表的なものに鳥取市佐治町辰巳峠産の植物・昆虫化石(約600万年前)や同市国府町宮下産の魚類化石(約1,700万年前)があげられ、前者ではトトリカエデなど植物化石46点および昆虫化石(イナバムカシアブラゼミ)1点が、後者ではイナバケツギョなどの魚類化石14点がホロタイプまたはパラタイプ標本\*に指定された。岩石標本・鉱物標本では、県内最古の岩石である約2億年前の片麻岩(西伯郡伯耆町産)や日本で二例目の産地発見となったヒスイ(八頭郡若桜町産)、県内の鉱山で採掘されていた地下資源鉱物標本約300点などを収蔵している。これらは、県内の地形・地質の成立や地下構造の理解のための証拠標本となっている。

地学標本の収集におけるトピックとして、まず1960年代から鳥取県および地質調査所(現：産業技術総合研究所)が県内の「地質図幅」を作成したことがあげられる。これに伴い当時の鳥取県立科学博物館でも化石を中心に収集を進め、当館地学標本の基礎が築かれた。1980年代には、良質な植物化石が豊富に産出することが明らかになった鳥取市佐治町辰巳峠において植物・昆虫化石の採集を精力的に行い、数百点もの化石標本を収集した。また平成14～16年度には鳥取市国府町宮下において当館による化石発掘調査事業が行われ、数百点の魚類化石標本を収集した。近年では、平成19年の谷口正夫氏のコレクション、令和3年の赤木三郎氏のコレクションなど、これまで活躍してきた研究者やコレクターの引退等に伴い、膨大な量の地学標本を寄贈していただいている。

\*タイプ標本：生物の新種記載の際、その生物の特徴を示す基準として指定される標本(群)をタイプ標本という。そのうち唯一の代表として指定されるのが「ホロタイプ」、それ以外のタイプ標本が「パラタイプ」である。パラタイプは、個体差や性差の参照に用いられる他、ホロタイプが失われた際に代わりとなる標本として指定されるなどの役割がある。



上から：植物化石トトリカエデのホロタイプ標本、魚類化石イナバケツギョのホロタイプ標本、ヒスイ、標本収蔵の様子。

## ◎植物標本

植物分野では約56,000点が登録されており、整理中の標本や登録外のものも含めると60,000点を超える。維管束植物約50,000点、コケ植物約3,600点の標本に加え、厳密な意味での植物ではないものの、地衣類約1,800点、藻類(シヤジクモ類を含む)約570点、菌類(キノコ類)約1,000点、変形菌類8点の標本も収蔵している。

維管束植物では実物標本のほとんどは腊葉標本の形態で保管しており、その他に展示や学習支援での活用のために絶滅危惧種などのレプリカ標本を製作している。実物標本の大部分は鳥取県内産のものであり、採集地点は県内のほぼ全域にわたる。大正元年採集のウキクサ(琴浦町八橋産)、県内ではすでに絶滅したガガブタ(昭和29年採集、鳥取市福部町湯山池産)、地元の植物研究者である田中昭彦氏が新種として発見・記載したサンインヒエスゲのタイプ産地標本(鳥取市鹿野町鷲峰山産)など、重要な証拠標本を含む。コケ植物はおもに乾燥標本として保管している。日本蘚苔類学会の会長も務めた越智春美氏から寄贈されたコケ植物標本群には、鳥取大学標本庫で保管されるホロタイプ標本\*の副標本2点が含まれている。地衣類は乾燥標本として保管しており、生駒義篤氏から寄贈された標本群には寄贈者自身が発見した新種イコマウメノキゴケのホロタイプ標本\*の副標本1点を含む。藻類は腊葉標本として保管している他、鳥取県沿岸で採集された大型海藻の透明樹脂封入標本や樹脂含浸標本を製作している。菌類は乾燥標本として保管している他、透明樹脂封入標本やレプリカ、拡大造形といったものを製作している。変形菌類は乾燥標本として保管している他、子実体の拡大模型を製作している。

植物標本の収集は、地域の研究者や専門家からのコレクション寄贈が中心となっている。昭和28年の越智春美氏によるコケ植物標本100点、昭和45年の生駒義博氏による維管束植物約2,600点、昭和54年以降複数回にわたる生駒義篤氏による地衣類約1,500点、昭和61年以降複数回にわたる田中昭彦氏による維管束植物約16,000点、平成8年の川上明敏氏による維管束植物約2,500点、平成22年以降複数回にわたる坂田成孝氏による維管束植物約2,000点の寄贈がそれぞれあった。また変形菌類では令和2年開催の企画展を契機に標本の収集がはじまり、同年に高橋和成氏から数百点におよぶ乾燥標本が寄贈された。



右上から：県内では絶滅したガガブタ(S29年8月15日鳥取市福部町湯山池) 腊葉標本、維管束植物のレプリカ標本、国内最大級のコブキサルノコシカケ(菌類)乾燥標本、ルリホコリ(変形菌類)の拡大模型、標本収蔵の様子。

## ◎昆虫標本

昆虫分野では約27,000点の登録標本があり、整理中のものや登録外のものを含めると50,000点を超える。そのうち約半数が、昆虫愛好家の方々等から寄贈されたコレクションによるものである。分類群別に見るとチョウ類が圧倒的に多く、全標本の6割以上を占める。続いて多いのがコウチュウ目である。一方でハチ目やハエ目は自然界で種数が多いグループであるにもかかわらず、収蔵数は非常に少ない。これは一般的に愛好家の間でチョウ類やコウチュウ目の人気が高いことを反映している。

これまでに寄贈されたおもなコレクションとして、昭和40～平成28年の細木正男氏によるコウチュウ目標本約3,000点、平成19年の佐藤博巳氏によるコウチュウ目・チョウ類などの標本約3,300点、平成22年の三島寿雄氏によるチョウ類標本約8,200点、平成28年の井堂雅澄氏によるチョウ類標本約600点、平成28年の本池省三郎氏によるチョウ類標本約3,000点、平成28年の田村豊實氏によるチョウ類標本約11,000点、令和2年の池田匡氏によるチョウ類標本約4,500点、といったものがある。これらのコレクションの中には、現在は鳥取県から絶滅してしまった種類など貴重な標本も含まれており、県の自然環境の変遷を考えるうえで重要な証拠資料となっている。なかでも平成22年寄贈の三島氏のコレクションには重要な標本が多く、鳥取県から絶滅した4種のチョウ(オオウラギンヒョウモン、ヒョウモンモドキ、ウスイロヒョウモンモドキ、シータテハ)がすべて含まれている。

これらの他、学芸員による調査や一般県民からの単発的な寄贈などによっても標本を収集しており、そういった中で重要な発見につながるものもある。令和2年に鳥取県東部の氷ノ山で発見されたヒョウノセンヒメハナノミは、調査で収集した標本を整理している最中に新種であることが判明し、当館職員により記載・命名されたものである。



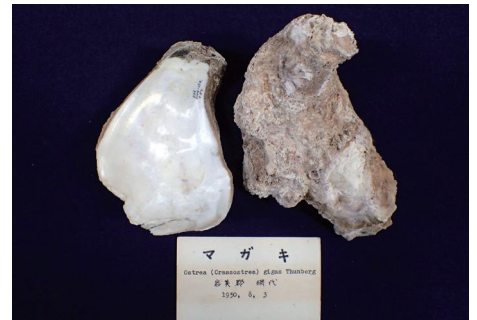
上から：県内では絶滅したオオウラギンヒョウモン(S58年7月15日船上山、三島寿雄採集)とヒョウモンモドキ(S34年7月4日大山、三島寿雄採集)、当館職員により発見・新種記載されたヒョウノセンヒメハナノミ(R元年7月3日氷ノ山、鶴智之採集)、寄贈されたコレクションの一部、標本収蔵の様子。

## ◎動物標本

動物分野が対象としているのは「昆虫以外の動物」で、約9,300点の標本がある。そのうち約半数が巻貝や二枚貝、イカ・タコなどの軟体動物である。その他カニやクモなどの節足動物、哺乳類や魚類などの脊椎動物に加え、カイメンやサンゴ、ホヤなどといった動物標本を収蔵している。

軟体動物標本では沿岸域の海産貝類や陸域の陸産・淡水産貝類の貝殻標本が大部分を占め、そこにイカ・タコ類の液浸標本などが加わる。節足動物標本では専門の研究者により採集・寄贈されたクモ類の液浸標本およびダニ類のプレパラート標本があり、いずれも多数のパラタイプ標本\*を含む。脊椎動物標本では展示を主目的とした本剥製や交連骨格標本以外にも、研究や証拠標本の保存を主目的とした仮剥製や皮革標本、分離骨格標本、液浸標本、卵殻標本などがある。

動物標本の収集は、学芸員による採集や死体の拾得、一般県民からの個別の寄贈、個人コレクションの寄贈、業者や個人からの購入、といったものによる。鳥取県立科学館時代、生物部門が新設された昭和25年には海洋生物の調査が行われ、この時に採集されたとみられるマガキやレイシガイといった貝類標本が現在でも残されている。同年から昭和50年にかけて、生駒義博氏から海洋生物標本や鳥類の仮剥製、哺乳類の骨格標本など多岐にわたる動物標本が寄贈された。昭和30年には国内外の鳥類・哺乳類剥製等60点が京都の標本製作士・山本寅代氏から寄贈(一部購入)され、この剥製群はその後も長きにわたって動物展示の中心となった。昭和38～59年には有田立身氏らによるクモ類液浸標本が、昭和46～令和元年には谷岡浩氏らによる陸産貝類標本が、平成21年には江原昭三氏が新種として記載したハダニ類のパラタイプ標本\*がそれぞれ寄贈された。これらは専門家でないと採集困難な種類も含み、きわめて貴重なコレクションである。また平成4年に鳥取市賀露海岸に漂着したオウギハクジラなどの海洋動物も可能な限り収集し、骨格標本や剥製、液浸標本などとして保管している。



上から：当館最初期に収集されたマガキ貝殻標本、クモ類パラタイプの液浸標本、ダニ類パラタイプのプレパラート標本、魚類の透明骨格標本、標本収蔵の様子。

## ■人文部門

人文分野の収蔵資料は考古・歴史・民俗の各分野によって構成されている。このうち歴史分野は古代・中世、近世、近現代と細分化する。「鳥取県の歴史(原始古代～近現代)・民俗に関わる実物資料及び事象の情報を収集・保存し継承する。」ことを長期目標(部門別テーマ)として、さらに中期目標(年度テーマ)を設定して、調査活動を行っている。その調査成果として実物資料と付属の情報とが収集されている。

開館10年を迎えた昭和58年頃に行った常設展示改善以降、「いつ行っても変わらない」常設展示に陥らないように約10年周期に見直す方法として、複製資料を製作している。県外に存在したり、長期展示に不向きな文化財、新知見により詳細が判明した資料の複製を製作してきた(等ヶ坪廃寺出土鴟尾、木造蔵王権現立像、後醍醐天皇肖像、尼子晴久肖像、伝桂香院像、徳川五郎麿・七郎麿像など)。また館蔵資料の保存・修復を続け、良好な状態の保持に努めている(考古資料の保存処理、刀剣研磨事業など)。

### ◎考古資料

当館所蔵の考古資料は、未登録資料を含め約1万点である。その来歴は様々で、当館の前身の科学博物館から引き継いだものや、発掘調査による出土品のほか、個人からの寄贈品等がある。考古資料の収集は、昭和29年度末に県立図書館からの個人コレクションの移管から始まり、翌30年度には当館の前身の科学博物館に研究室と郷土考古展示室が開設されたことを契機に収集が継続された。あわせて、昭和30年代末頃から盛んとなる県内各地での開発工事に伴う発掘調査では、その体制が十分整ってはいなかったため、当館の学芸員も発掘調査に加わることも少なくなかった。こうして調査された因幡国庁や塞ノ谷遺跡、浜坂横穴墓群等の出土品も当館が保管している。

そのほか個人からの寄贈品や、購入品等により、次第に収蔵点数は数を増していった。なかでも昭和61年に購入した重要文化財子持勾玉(旧安富コレクション)は、当館が所蔵する初の国指定文化財となっている。

また、館蔵品に関する重要な発見もあった。平成23年度に見つかった宇倍神社経塚出土の経筒に納められた金字経は金泥で「法華経」を書写したもので、全国的にみて奈良県の大峰山や、和歌山県の高野山に次いで



民俗資料(漁具)の保存処理(脱塩作業)



鳥取市塞ノ谷遺跡の調査風景



重要文化財 子持勾玉



銀象嵌の大刀(浜坂横穴墓群出土)

修復後(上から)



サメの線刻がある銅剣

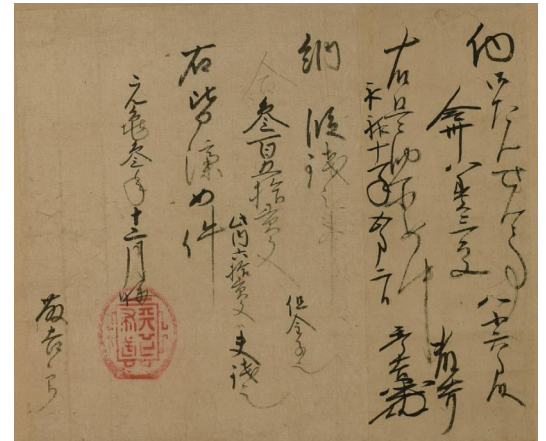
全国3例目となる貴重な発見となった。また平成28年度の弥生時代の銅剣に刻まれたサメと考えられる線刻の発見は、山陰地方の弥生文化の独自性をしめすものといえる。また、保存修復中のサビで覆われた鉄刀から銀象嵌が見つかる等の発見もあった(いずれも現在常設展示中)。

### ◎古代・中世資料

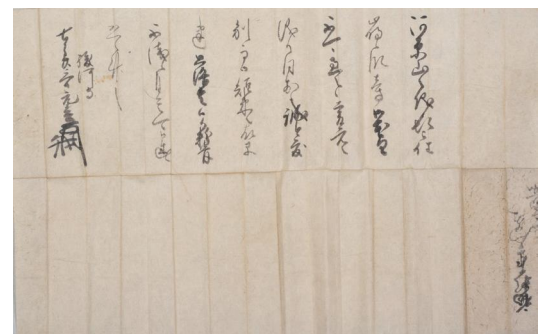
鳥取県域を構成した因幡・伯耆国は戦国時代から江戸時代初期に相次いで領主が交代したため、全国的に見ても古代・中世資料が僅少であるといわれている。その中で、当館は貴重な古代・中世資料を研究し、次世代に引き継ぐため資料収集をすすめてきた。昭和54年度に石谷コレクションの中世文書が寄贈されたのを皮切りにして、平成2年以降県内寺社旧蔵資料(経久寺文書・方見神社神職池本家資料など)、鳥取藩士家の文書(山田家資料など)など、急速に収蔵品を充実させてきた。また、瀧山寺鰐口などの古文書以外の金石資料なども収集している。

個人コレクションを引き継いだものとしては安富コレクション・石谷コレクション・秋田政蔵コレクションがある。これらは県内外の膨大な資料から成り立ち、最も古いものでは南北朝時代の京都・南禅寺の材木船にかかわる資料や、春屋妙葩・大内義隆・織田信長・豊臣秀吉・南海坊天海などの日本史上著名な人物の発給文書が含まれている。

経久寺文書や方見神社神職池本家資料などの県内寺社に関する資料には、室町・戦国期に伯耆国を治めた山名氏・尼子氏に関わる古文書が多い。また、近年は武家文書の収蔵品も充実してきている。平成29年度に寄贈を受けた宮本家文書は、大内氏・山名氏・毛利氏による伯耆国の武士への発給文書の原本16通で、当県の武家文書として白眉のものといえよう。他にも、購入した浅津(あそづ)文書は、県中部に大きな勢力を持った南条氏に関わる資料として県指定文化財となった。加えて、鳥取藩士旧蔵資料の中には戦国期の池田家との関係を示す池田輝政の判物も数多く含まれている。



織田信長朱印状・豊臣秀吉請取状(安富コレクション所収文書)



吉川元春書状(宮本家文書)

### 鳥取県立博物館の中世資料の収集

指 定	文書名	中世文書の主な内容	収集方法	点数(中世)	収集年度
	石谷コレクション所収文書	南禅寺関係資料、春屋妙葩・大内義隆・南海坊天海などの書状	寄贈	8	昭和54年
	安富コレクション所収文書	織田信長・豊臣秀吉・豊臣秀次らの発給文書	購入	8	平成2年
	山田家資料	備前国鳥取庄に関する浦上氏発給文書	寄贈	6	平成4年
	大谷中島家文書	因幡国の土豪・中島家の家文書。山名豊弘の発給文書	寄贈	1	平成5年
	秋田コレクション所収文書	羽柴秀吉書状、中村一氏家臣河毛家の文書	寄贈	10	平成12年
	経久寺文書	尼子氏・三沢氏の関係資料	寄贈	7	平成21年
県指定	瀧山寺鰐口	倉吉関金にかつて存在した瀧山寺の南北朝時代の鰐口	購入	1	平成21年
	吉川経言書状	吉川経言(広家)の発給文書	購入	1	平成24年
県指定	方見神社神職池本家資料	方見神社神領関係文書	寄贈	8	平成26年
	尼子勝久感状	尼子勝久の発給文書	購入	1	平成28年
県指定	宮本家文書	伯耆国淀江の武士・村上氏と福頼氏に関する武家文書	寄贈	16	平成29年
県指定	浅津文書	伯耆国浅津の武士・浅津氏に関わる南条氏の発給文書	購入	2	平成4・30年

## ◎近世資料

昭和47年、博物館の開館により史料係が新設された。ここに科学博物館にはなかった史料館的機能(とくに近世史料)を持つ部門が誕生した。

史料係の活動目的には、当初から鳥取県の歴史に関する資料を収集・保存・研究・活用し、県民の知識向上に資することが掲げられており、とくに収集に関しては、県立図書館との役割分担から、明治4年以前の資料を受け入れることを原則としていた。こうした経緯から旧鳥取藩主池田家に伝来した約14,700点の資料群(「鳥取藩政資料」)は、県立図書館から博物館へ移管され、研究活用が進められることになった。この資料群は、明治以降、東京の池田邸に保管されていたが、第二次大戦中から数回にわたって鳥取県立鳥取図書館に寄託され、昭和44年8月に池田徳真氏から鳥取県に御寄贈いただいたものである。一応の整理・分類はなされていたが、膨大な資料であるため、一点ごとの詳細な目録がなく、調査と整理は資料を受け継いだ博物館の担当者が当たってきた。そして平成9年に『鳥取藩政資料目録』を刊行し、藩政資料は全国有数の大名家文書の一つとして広く活用されるようになった。

上記以外の資料収集については、当初は県立図書館からの移管資料や、購入によるものが主流を占めた。その後は個人や団体からの資料の受け入れ(寄贈)が収集の中心となり、その内容も古文書に限らず、時代も近代を含む絵画、刀剣、武具甲冑、生活道具など、さまざまな分野に及んでいる。個人や団体からの申し出を受けた寄贈資料は、55,000点以上になっている。これらの資料は県民の歴史や文化を学ぶことができる文化財として未来へと引き継いでいくとともに、展示・普及活動・研究といった場を通じて活用が図られている。



収蔵庫内の古文書

## ◎近現代資料

近現代では、鳥取県が作成した公文書を除く、明治時代以降の県と県民に関わる資料を収集している。

当館の近現代資料収集の歴史は、平成7年度、鳥取県が「戦後50周年記念事業」の一環として県民から収集した戦争資料を、同年、博物館が受け入れたことにはじまる。そして、平成9年度、人文係(当時)内に近現代担当が新設され、戦争資料以外の収集も開始。同13年度には常設展示に

近現代コーナーを設け、資料の収集と保存、展示の体制が整えられた。

資料点数は、当初約2,000点ほどだったが、約30年経過した現在は戦争関係以外も含め約5,000点まで増えた。その内訳は、母胎となった戦争資料が多く、明治時代から昭和時代の鳥取県出身の将兵の旧蔵品や銃後の生活資料が充実している。この状況を受け、戦争資料以外の手薄な分野の資料提供を、平成9年度から県民に呼びかけ、その成果として同11年に催物展「鳥取県民の明治・大正・昭和」を開催した。その後、平成23年度に企画展「鳥取鉄道物語」、27年度に企画展「鳥取と戦争」を開催し、関係資料の収集に努めた。



すべて見せます展(R4年)での展示

### ◎民俗資料

民俗資料の収蔵数は4,132(令和4年9月現在)で、その多くの収集方法は寄贈による。民俗分野の資料収集は、前身である鳥取県立科学館の時代にさかのぼる。同館では、民俗部門が新設された昭和38年には柳屋(鳥取市・田中達之助)、備後屋(倉吉市・三好平吉)、おぐら屋(岩美町・小椋幸治)の制作する郷土玩具の採集・購入に始まり、灯火(トウダイ、石油ランプ、燭台、行灯)の寄贈を受けている。平成3年まで、隔年で刊行されていた目録の最終号では収集傾向が分析されている。実物資料の寄贈が圧倒的に多い民俗分野であるが、製作・販売されているもの(運搬具や漁具など)を購入することもある。さらに近年では鳥取の食文化を紹介するレプリカや、明るさを体験する行灯やランプの模型なども製作した。

民俗分野に限ったことではないが、開館以来、調査研究テーマを設定してきた。このテーマが展示や報告書(国庫補助事業を含む)作成に関わる。そして調査成果も情報として保管している。その一部である民謡などの音声データ、民俗芸能や祭り、行事の映像資料はホームページ上で公開している。

	第1集(1966年)	第2集(1973年)	第3集(1976年)	第4集(1984年)	第5集(1990年)
衣食住	148	181	12	17	※115
生業生産	55	170	※360	39	164
交通公益通信	38	36	0	14	13
民間芸術娯楽	※54	※33	5	※56	9
人の一生・年中行事	14	55	7	2	25
その他	6		1		2
備考	※うち郷土玩具54	※うち郷土玩具28	※うち漁具127, 大工用具228, 製薬用具2, 鍛冶用具1	※うち郷土玩具5	※うち農具畜産用具44, 漁具7, 木地屋用具2, 大工用具30, 鍛冶用具26, 紙漉用具5, 竹細工用具1



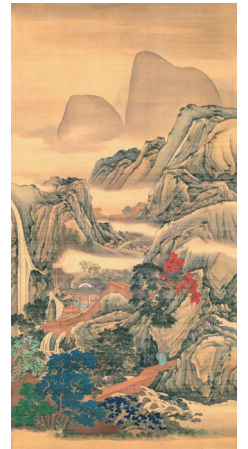
鳥取県の食文化レプリカ



## ■美術部門

### ◎コレクションのはじまり

核となるコレクションを持たずにスタートした当館の美術部門は、開館前年である昭和46年に県民から鳥田元旦の《秋景山水図》が寄贈されたことを端緒に、鳥取県ならではの特色あるコレクション形成を目標として地道な収集活動を行ってきた。開館後まもなく鳥取県庁や県議会、県立図書館をはじめとする県教育委員会各施設から保管換された美術品20点余りに、年間に1～2点の購入作品を加えることでその充実が図られたが、最も大きな役割を果たしたのは県内篤志家たちの寄付であった。47年度末の時点の美術コレクション18点のうち、13点が県内企業や個人からの寄贈によるもので、49年度末には、山陰合同銀行、山陰放送、鳥取県歯科医師会、住友銀行、鳥取ガス、鳥取銀行、鳥取信用金庫、日本海テレビ放送、扶桑相互銀行、野津英顕氏の9社1名による寄付金により、前田寛治の代表作《棟梁の家族》100号が購入された。



鳥田元旦《秋景山水図》

### ◎前田寛治作品の収集

昭和53年度(昭和54年3月16日)には条例の整備により「鳥取県美術品取得基金」が設置され、美術品の機動的な収集活動が可能となった。当時の鳥取県知事・平林鴻三、西尾優教育長、前田寿男博物館長の3人の連名による基金設立趣意書には、「当面は主として前田寛治の作品を計画的に収集する」との記載があり、のちに同画家作の作品取得に関する要項が策定された。これに基づき、前田の画業のなかでも特色をよく表す代表的な作品を選定して、当面20点を目標に収集する計画が立てられた。昭和55年度には《花と子供等》、《労働者》、《少女》の3点が基金で購入され、県政100年を迎えた昭和56年度には、その記念として《少女と子供》、《自画像》、《物を喰う男》、《縋帯をした男》、《横臥裸婦》、《白い服の少女》と一挙に6点を収蔵、その後も昭和59年度に《工場風景》、昭和61年度に《伏臥裸婦》、昭和63年度に《静物》を収蔵し、堅実にコレクションを充実させていった。



辻晉堂《拾得》1958年



前田寛治《棟梁の家族》1928年

平成に入り鳥取県立博物館美術資料収集委員会が設置されると(平成3年)、3年間かけて前田寛治の素描作品229点と油彩画9点の収集が実現された。寄託資料類と併せ、郷土を代表するこの画家の基礎研究機関の機能を備えることを目指したことがうかがえる。前田寛治以後の作家の作品については、開館以来そのほとんどが作家ないし作家の遺族からの寄贈によって収集されてきたが、この頃より辻晉堂や伊谷賢蔵といった戦後に活躍した作家たちや、藤原晴彦、斎鹿逸郎といった同時代の作家の作品の購入も手がけはじめ、コレクションの幅を広げていった。

### ◎蒐集家の作品寄贈による充実

他方、近世以前の絵画や工芸分野の一部については、県内蒐集家からの大口の寄贈が美術コレクションを拡充させた側面も見逃せないだろう。特に八頭郡智頭町の旧家 石谷家より昭和58年度・平成17年度の2度にわたり受贈した「石谷コレクション」は、県指定文化財の土方稲嶺《東方朔図》をはじめ曾我蕭白《月夜山水図》、与謝蕪村《風竹図屏風》のほか、中国明・清時代の書画、近代の京焼をはじめとする工芸の優品300点近くからなる。また、昭和61年度の君野コレクション、平成2年度の安富コレクション、平成29年度の岸コレクションの受贈を通じて、近世鳥取画壇を中心とする絵画、書跡、工芸、歴史資料等が加



土方稲嶺《東方朔図》  
(石谷コレクション)



片山楊谷《花王獸王図》  
(安富コレクション)

わり、当館の近世絵画・工芸コレクションは質、量ともに大幅に向上したのである。

また、令和元年度に土方稲嶺の末裔 杉浦家より受贈した「杉浦家伝来資料」についても言及しておきたい。前年度の展覧会開催が契機となり受贈に至った資料群であるが、稲嶺の肖像画をはじめ画稿や印章など150点からなる資料群であり、今後の当館の調査研究を一層充実させるものである。

### ◎美術館構想と収集活動

平成9年、鳥取県教育委員会事務局文化課内に「美術館準備係」が新設されたのと同時に、「鳥取県美術品取得基金条例」が新たに制定され、5億円の基金が設置された。県立美術館の建設へ向けたこの動きと連動する形でこれまでの収集方針が拡大され、郷土ゆかりの作家と関係が深い国内外の作家や、鳥取県を描いた国内外の作家の作品の収集が始まった。これにより1930年協会の作家たちやクールベ、ヴラマンクといった前田寛治と関連する作家や、バーナード・リーチ、濱田庄司ら民藝運動の中心人物、須田国太郎、國領経郎、やなぎみわなど、多彩な顔ぶれによるコレクションに広がっていった。さらに前田寛治の滞欧作や岡村吉右衛門のアジアの染織コレクション、塩谷定好の写真作品など、美術館の顔となる作品群が集められていった。



ギュスターヴ・クールベ  
《まどろむ女(習作)》1852年頃

平成11年、片山善博知事による大規模プロジェクト見直しの方針が出され、結果、準備組織は解散、平成15年に美術館建設計画が凍結されたものの、基金による美術品の取得については継続的に行われた。その後県立博物館の施設の老朽化、狭隘化から平成27年に県立美術館を新設する動きが始まり、「国内外の優れた美術品」や「同時代の美術の動向を示す作品」というふたつの方針が旧来のそれに加えられた。令和4年3

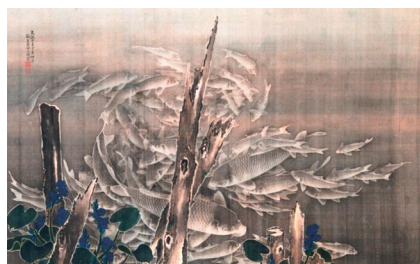
月末時点のコレクション総点数は10,393点で、平成9年の新基金の設置時には約2,000点余りだった収蔵品は、約5倍となった。その内訳は、近世日本画709点、近代日本画284点、洋画710点、水彩・素描1,980点、写真512点、版画641点、彫刻132点、工芸1582点、書257点、資料・その他3,586点である。



國領経郎《遠い海》1977年

### ◎美術コレクションにおける各分野の特徴

● 因幡32万5千石を誇った鳥取藩では、鳥取城下に近い因幡地方(県東部)を中心に「因幡画壇の黄金時代」とも称される高度な絵画文化が開花したが、これは藩お抱えの「御絵師(藩絵師)」の果たした役割も大きい。代表的な藩絵師に、宋紫石のもとで学び、写実に基づく独自の表現を切り開いた土方稲嶺、狩野派の枠にとらわれず琳派や南蘋派、



黒田稲皐《群鯉図》1827年



沖一峨《花杲方円図》

浮世絵など幅広く学んだ沖一峨、一峨の元で古画を丹念に研究し、後に藩絵師に登用された根本幽峨らの名が挙げられる。また、藩士や民間画人のなかにも個性豊かな画家が多い。緻密で異国情緒に富んだ画風で知られる西館池田家の家臣片山楊谷、実兄・谷文晁のもとで学び、華麗な色彩と密度の高い描写を得意とした鳥取藩士 鳥田元旦、稲嶺の弟子で整然と並ぶ群鯉像を得意とした黒田稲皐らである。近世絵画部門では、これらの画家の収集に力を入れている。

●日本画部門のコレクションは、鳥取における近世絵画の伝統を引き継いだ日本画家らの作品で構成されている。近代的な美術教育システムが整備される一方、近世以前の徒弟制的な一面も残った日本画分野では、独学で絵を身につけ、後に「浪速風俗画」で知られる菅橋彦や、主に地元で後進の育成に当たった中住道雲のように、官展から距離を置き、主に在野に活躍の場を見出した画家たちがいる。その一方、京都画壇と深いつながりを持つ画家も数多く見られ、谷口香嶠、山元春挙に師事し、「叙情ロマンチズム」と喩えられた画風の小早川秋聲や、同じく春挙門には京都市立絵画専門学校出身の中島菜刀、毛利秋晃らがいるほか、一時大阪美術学校で教鞭を執った八百谷冷泉は、道雲に学んだ後に春挙に師事した。ほか、持田卓人、大畠松谷、前田直衛らも京都画壇で学んでいる。他方、橋本雅邦に師事し、「郷土最後の狩野派絵師」と称された河村芳舟、東京美術学校師範科出身で美術教育に携わった神庭白梨、伊東



菅橋彦《神倉秋景》1962年

深水和橋本明治に師事し、日展理事長を務めた濱田台兒ら、上京して学び活躍した画家たちも見逃すことはできない。



中島菜刀《麒麟獅子》1938年

●洋画部門については、鳥取県に初めて油彩画をもたらした遠藤董に始まる明治から現代に至る鳥取県ゆかりの作家、および前田寛治と関連する作家の作品を中心としたコレクション構成である。東京美術学校に学んだ安岡信義、森岡柳藏、香田勝太、中井金三ら黎明期の画家たちは、外光派など当時最先端の画風を身につけ、官展を主な活動の場とする一方で、中央から地方へその知識や技術を伝える役割を果たした。大正期の日本洋画界に足跡を残した前田寛治のコレクションは質、量ともに全国に誇るものとなっており、さらに佐伯祐三、里見勝蔵ら1930年協会の作家たちの作品を加えることで、充実を図ってきた。これに続く世代である浜田直伴、伊谷賢蔵、尾崎悌之助、松田晃八、笹鹿彪、丹羽長兵衛、國



遠藤董《清水彦五郎の像》1880年頃

頭繁次郎ら第二次大戦を挟みながら戦後の鳥取の洋画壇にて重要な仕事をした作家たちの作品がまともって収蔵されており、なかでも行動美術協会の設立者のひとりであり、京都学芸大学西洋画科で教鞭を執りながら独特の赤褐色で山岳を多く描いた伊谷は、初期から晩年までの油彩画に加えて、デッサンやスケッチなどの素描や資料を受贈し、アーカイブ的なコレクションを形成している。また、現代絵画の着実な収集活動に取り組んでおり、福留章太、齋鹿逸郎、ニシオトミジ、藤原晴彦、フナイタケヒコら抽象を描く作家から、山本朔士、谷田穎郎、越野邦夫、山本恵三、中村芳雄、有田巧などの具象絵画まで、戦後の多様な絵画表現を反映したコレクションとなっている。



伊谷賢蔵《裏大山晩秋》1969年

●彫刻部門の収集は長谷川塊記や早川巍一郎ら中央の団体展で活動した作家の作品に始まった。収集活動の初期には、塑造からブロンズを製作し、収蔵することもあった。コレクションの中心を成すのは、戦前は木彫で、戦後は陶彫で高い評価を得た辻晉堂の作品である。二度の大規模な回顧展の開催を契機に継続的に収集が行われ、代表作を多く収蔵することとなった。ほか、辻に私淑した山本兼文や、谷口俊ら県内で活動した作家、福嶋敬恭、井田勝巳、中ハシクシゲら中央で活躍する鳥取ゆかりの作家に加えて、村岡三郎や堀内正和といった戦後の優品の収集も進めている。



長谷川塊記《ポーズ》1924年  
(1982年鑄造)



福嶋敬恭《Untitled》1975年

●工芸部門については、因久山焼の陶器など江戸後期の陶磁器類をはじめ、吉田章也がリードした民藝運動に関連した生田和孝、因州中井窯などの陶器、岡村吉右衛門の染織作品に、バーナード・リーチや濱田庄司、河井寛次郎ら民藝運動を代表する作家の作品が特徴的である。工芸研究者としても活躍した岡村吉右衛門のアジアの染織資料約200点は、「岡村コレクション」として工芸部門の一角を占める。一方、アメリカでも活動した瀬戸浩、重要無形文化財保持者の前田昭博の高い造形性を持つ陶磁器も、当館のコレクションを代表する作品群である。



バーナード・リーチ《扁壺》



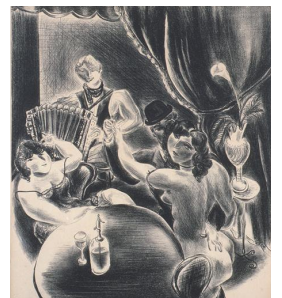
前田昭博《白瓷壺》2009年

●版画部門については、他の分野同様鳥取にゆかりのある作家たちのコレクションをメインとしている。創作版画の草分けであり、城をモチーフとした作品で全国的に知られる橋本興家は、代表的な城のシリーズや、大山や砂丘など郷土の風景を描いた作品を揃えている。また、吉田璋也との出会いから民藝運動に参加し、棟方志功の版画に影響を受けた長谷川富三郎、多色刷の木版による抽象表現を追求とした野崎信次郎、シルクスクリーン技法とコラージュを併用し、カラフル



橋本興家《錦錆の城 姫路城》1954年

で幾何学的な構成を特徴とする物部隆一らのまとまった数の作品を収蔵している。令和2年度には、倉吉市在住の医師、垣田堅次郎氏の版画コレクション150点余りの寄贈を受け、菅井汲や宇佐美圭司、李禹煥といった美術家たちの版画作品や、深澤幸雄の銅版画、ジョルジュ・ルオーの版画集『流れる星のサーカス』のシリーズなど、近現代版画のコレクションの厚みを増すことができた。



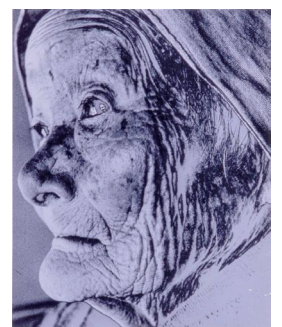
国吉康雄《踊り》1928年

●大正期より豊かな写真文化を持つ鳥取県は、赤碕に居を構えながら日本を代表する芸術写真家として活動した塩谷定好が残したヴィンテージ・プリント100点をまとめて収蔵したことに端を発し、植田正治、杵島隆、岩宮武二という全国的に活躍を見せた4作家の写真作品



塩谷定好《天気予報のある風景》1931年

を体系的に収集してきた。植田については、県西部伯耆町の植田正治写真美術館が充実したコレクションを誇るため、代表的なプリントに絞った収集を、杵島、岩宮については主要なシリーズを揃え、仕事を概観できるようなコレクション形成をそれぞれ行ってきた。これらをコレクションの礎石としながら、近年では池本喜巳、やなぎみわなど、現代写真にも範囲を広げて収集している。



杵島隆《老婆像》1950年



植田正治《カコ》1949年